

愛媛県における^{りんご}苹果産地の転移と形成

窪田重治

はじめに

小林章は『果物と日本人 (1986)・P216』に、「リンゴはもともと冷涼乾燥日照に恵まれた気候を好むから、温暖多湿な気候下で栽培すると病虫害の発生が多く、収穫果の着色が劣り肉質にしまりがなく、収穫後の日持ちが悪い。ただし、暖地栽培では早期出荷ができ、市場価格が良いのが多少有利であった。

最近のように貯蔵技術が著しく進歩し、前年の晩生種の優秀品種を暖地での早生品種の出荷期頃までたやすく保存できたり、やがて南半球から成熟リンゴが輸入されるようになると、わが国における暖地リンゴの栽培は経営的に絶対に成立しない」と記している。

柑橘王国愛媛県の果樹園芸農業に先駆的役割を果たしたのは、苹果(林檎)の栽培であった。明治中期の果樹栽培の先駆者達の多くが苹果の栽培を手掛けている(表1)。彼等は旧里正か富農層篤農家資産家が多く、副業的栽培とはかけはなれた大規模経営者で、村の指導的立場にあった。

中予地方の果樹園芸農業の先覚者は、温泉郡道後村^{もちだ}持田(現・松山市)の旧里正三好保徳である。三好保徳の長男徳行は『からたち(1975)PP377-380』に、「イヨカンと村上教授」と題して、「父の経営しておりました果樹園は、自宅の北側の夏柑畑、お築山の夏柑・桃・^{りんご}苹果畑というふう^{つぎやま}に数ヶ所に散在しておりました。そんなわけで父は早くから自転車を利用して各所の園を

巡回し、園の小屋に使用人達と寝食を共にして経営に従事し、果樹園を百果園と名付けておりました……」と記している。

三好保徳は1892(明治25)年、湯山村溝辺(現・松山市)で、10アールを開墾し和梨300本を植付け、1893(明治26)年には温泉郡桑原村^{ひらの}東野(現・松山市)に3畝を開墾して桃・苹果・梨を栽植した。1896(明治29)年には温泉郡小野村北梅本横原(現・松山市)の山林7畝を開墾して苹果を栽培した。温泉郡長は三好保徳に委嘱して、農家の副業に果樹栽培

表1 果樹栽培草創期の大規模経営者

1町=99,174 a 約1ha

氏名	出身地	時代	経営面積	果樹の種類
加賀山 金吾	北宇和郡立間村	明治20年代	10町歩以上 立間村	柑橘
葉師寺 猪之七	北宇和郡立間村	"	10 "	"
三好保徳	松山市持田町	"	10 " 小野・桑原・湯山村	桃・梨・苹果・ 夏橙
清水谷 巖	西宇和郡日土村	"	10 " 日土村	梨・柑橘
田村 昌八郎	温泉郡興居島村	"	10 " 興居島村	苹果・桃
尾上 又次郎	温泉郡浅海村	"	10 " 浅海村	苹果・梨・蜜柑
渡部 網興	温泉郡荏原村	明治30年代	10 " 小野村6町(赤々園) 坂本村4町	梨
仙波 八三郎	温泉郡久米村	"	8町歩	梨
内田 実	松山市持田町	"	14町歩(眞香園) 温泉郡小野村	梨5万貫 園員50名
森実 義夫	宇摩郡松柏村	"	10町歩以上 松柏村	桃・梨・苹果・ 柑橘
吉澤 武久	伊予郡南山崎村	明治40年代	8町歩 南山崎村	枇杷5町歩 柑橘3町歩
岩田 鷹太郎	温泉郡立岩村	"	梨の大経営者(香梨園)	梨

阿川一美 1988 果樹農業の発展と青果農協・財団法人果樹産業振興桐野基金P373による。



写真1 果樹園芸の祖 三好保徳君頌功碑
 大正10年10月伊予果物同業組合建立。
 県立道後動物園内 1977年10月2日 窪田撮影

果樹の種類は苹果が魁・中成子(祝)1,840本梨682本柑橘類2,774本である。河野の小野村横原の園は1991(明治44)年温泉郡往原村東方の渡部網興に売却し「赤々園」と命名して経営された(窪田1990 PP12-13)。

本稿は愛媛の果樹園芸農業の草創期に、先駆的栽培品種として導入し、先導的役割を果たした苹果栽培の盛衰と産地の転移形成のプロセスについて考察した。

1 暖地苹果の産地形成

愛媛県農会の『伊予乃園芸(1916)PP12-13』による1909(明治42)年の統計資料では、愛媛県の苹果栽培面積は100町あった(表2)。1915(大正4)年には86.7町に減少しているが、郡別資料(表3)では温泉郡が最も盛んで、越智郡がこれに次ぎ両郡で県下の苹果園の94.6%を占めている。特に越智郡は未結果園の割合が高い。1897(明治30)年以後には東宇和郡・東予の処々にぼつぼつ苹果の栽培が始まった。

表2 愛媛県の苹果生産の変化1909~1915

	明治42年	大正4年	増減
栽培面積	100町3112歩	86町7208歩	-13町5904歩
生産量	97,202貫	72,623貫	24,579貫

資料：愛媛県農会1916 伊予乃園芸により作成
 (注) 町……9917.36m² 貫……3.75kg

を奨励し、除虫菊を間作すると有利なことを郡内を巡回し講話普及に努めた。その功績は1921(大正10)年伊予果物同業組合が、道後公園内に建立した三好保徳翁頌功碑文に刻字されている(写真1)。

『小野村史(1960)P284』には、「1897(明治30)年頃、道後持田の苗木商三好保徳が北梅本横原の山林約5畝を買い求めて苹果栽培を始め、小野村には当時一台も見られなかった自転車に洋服姿で往復したものであった」との一節がある。

三好保徳は1905(明治38)年44才で急逝したため、三好の園は石手の河野房五郎に売渡した。

表3 郡別苹果の栽培面積と収量・生産額状況 大正4(1915)年

郡別	結果反別	未結果反別	合計	収穫量	価格
新居郡	0町0701歩	—	0町0701歩	6貫	3円22銭
越智郡	22,9007 30.4%	10町3000歩 90.5%	33,2007 38.3%	31,221 43.0%	12,366,38 44.0%
温泉郡	47,8000 63.4%	1,0000 8.8%	48,8000 56.3%	38,180 52.6%	14,749,50 52.5%
伊予郡	0,6000	—	0,6000	295	71,00 0.2%
上浮穴郡	0,1500	0,0200	0,1700	24	7,05
喜多郡	0,3100	0,0100	0,3200	35	7,00
西宇和郡	0,0200	—	0,0200	2	0,70
東宇和郡	3,4000 4.5%	—	3,4000 3.9%	2,810 3.8%	843,00 3.0%
北宇和郡	0,0400	—	0,0400	—	—
南宇和郡	0,0500	0,0500	0,1000	50	25,00 0.1%
県計	75町3反408歩	11町3反800歩	86町7反208歩	72,623貫	28,072円85銭
	100.0%	100%	100.0%	100%	100%

資料：愛媛県農会 1916年 伊予乃園芸P28により作成

表4 愛媛県の苹果栽培面積と生産量の変化

	明治27年	大正元年	大正10年	昭和5年	昭和15年	昭和26年
本数・面積	12,780本	92,550本	3,991本	9,345本	27,404本	156反
生産量	31,493㍻	145,548㍻	4,918㍻	5,380㍻	23,469㍻	10,170㍻

資料：愛媛県 1951 愛媛県農業の概況により作成

伊予果物同業組合の『伊予のくだもの(1932)PP29-30』には、「管内の苹果は故三好保徳によって拡められたものと、興居島を中心に三津・新浜より普及されたものがある。三好翁は1904(明治37)年秋、桃梨と共に普及したのである。品種は紅魁・中成子(祝)・紅玉他数種類であった。いづれも綿虫のために大被害を被り、収支償ふものがない状態であったので年ならずして他の果樹に換へたものが多かった。こうして、苹果は到底暖地にはできないものとして、断念されたようであったが、最近硫酸ニコチンによって綿虫駆除が容易に行なわれるようになったので、再び苹果熱が起り少し宛増してきたようである」と記している(表4)。

温泉郡浅海村味栗(現・松山市)の尾上又次郎は1895(明治28)年^{ばんじよなる}番所ヶ平に苹果3.5[㍻]、梨1[㍻]、柑橘0.5[㍻]を栽植し成果園と命名した。1901(明治34)年には良田を売却して山林を買収開墾し、1902~1904(明治35~37)年に10[㍻]余に拡張した。

苹果は1906(明治39)年綿虫被害に苦慮して青酸ガス燻蒸法を実施したが、決定的効果がないまま苹果栽培を断念し、伐採したり興居島村(現・松山市)の苹果栽培者に1本50銭で分譲し処分している(窪田1991・P31)。

愛媛県農会の『伊予乃園芸1916PP12-13』には「東宇和郡宇和町(現・西予市)門田彦太郎の苹果園も1901(明治34)年の開園で、越智郡岡山村(現・今治市)の村上友次郎の苹果園もその前後である。温泉郡興居島村(現・松山市)泊には三十余年を経たる古樹二本あり、一は紅魁一つは中成子(祝)で1879(明治12)年兵庫県の苗木商がもたらしたもので、同時に^{わし}驚ヶ

巢にも植付けたものの如く、現今その古樹あり。しかれども当時は広く栽培するに至らず」とある(図1)。

2 興居島村の苹果栽培

興居島(現・松山市)には1903(明治36)年100[㍻]の苹果園があった。1891(明治24)年、田村昌八郎は由良宮之迫の山林6反19歩(約60[㍻])を開墾して8反1畝5歩(約80[㍻])の『晴耕園』を開き、苹果209本和苹果8本を移植した。

晴耕園の記録『晴耕園史^{註1}1910 P172』には、「興居島村の苹果植付の始まりは、1879(明治12)年撰津の苗木商人西洋林檎と称し少数の苗木を齎し、由良の

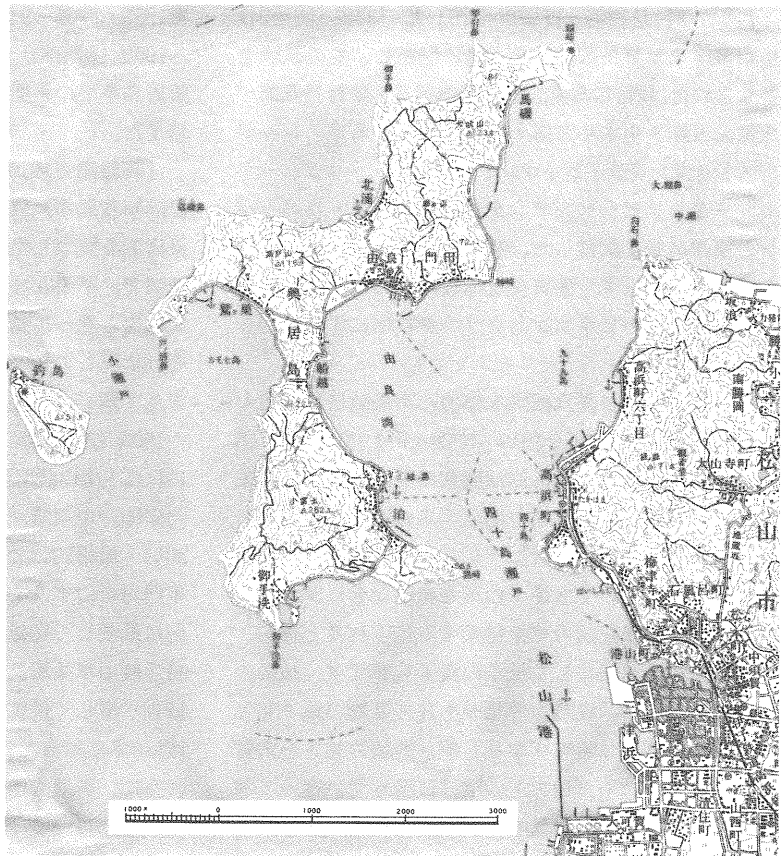


図1 国土地理院 1:50,000 三津浜 昭和51年修正 興居島付近の図

東矢馬吉3本泊の山本九五郎8本山本喜八2本植う。品種は主に紅魁・中成子(祝)なりしを後にて知れり。之を本村における菜果植付の初めとすべし。当時は全く洋種苹果なるものの性質を知らず、単に苗木屋の勧めにより漸く畑の一隅に植付たるに止まれり」とある。

『温泉郡誌1909 P273』の興居島村誌の項には、「1877(明治10)年2月頃、大阪の果樹商人が苗木を携えて来りて売り捌きしことありき。その当時にありては誰もその果樹の性質知るものなきをもって、之を買うものなかりしに、独り泊の山本権四郎試みに苗木を買い、これを所有の畑に植付しに、3~4年を経て実を結び始め、1881~1882(明治14~15)年の頃に三津市場に於て非常に歓迎せらるるに至れり」と記している。

1883(明治16)年愛媛県勸業課は苹果および天津水蜜桃・上海水蜜桃の苗を興居島村に配布した。この時栽培したのは晴耕園主田村昌八郎・篠塚国松・堀内新三の3人であった。山田元五郎と中本小三郎の二人には、晴耕園より分譲した(愛媛県青果連1968・PP270~278)。

『興居島村誌1909・PP270~278』は、「1891(明治24)年頃県庁より苹果苗数種を本村に配布し、その試験を委せられた。栽培した篤志者は堀内新三・田村昌八郎・山田元五郎・中本小三郎・篠塚国蔵の5名で、レッドアストラカン(祝)・ヒルマンドクラーク・メナジェー・ニュータウンピピンサンダー・スリンヌ・ウペッパンの西洋苹果を試植した。しかし栽植法が幼稚で十分な成果があがらず、生育を全ふしたものはレッドアストラカン(祝)・ヒルマンドクラーク数本にすぎなかった」という。

田村嘉信は田村昌八郎が本格的に苹果栽培に取組んだ動機を『晴耕園史』^{註2} 1910 PP20-21に「1890(明治23)年4月、田村昌八郎は東京に開設の第3回観業博覧会を視察し、東北地方出品苹果の麗しく陳列せられたるを見て感嘆之を久しうせり。

当時本村においても多少の苹果産出なきに非ず、又自ら栽培する県配賦の苹果結果するに至れりと雖も、栽培上の知識幼稚にして種類の良否も弁せず、採取の季節正しからず。晩熟の種類をも凡て夏物の桃・梨と共に採取するが如き有様なりしが、酸気の強さと肉質の柔軟なるとは未だ地方人の嗜好に適せず、従って需要の涉々しからざるを見て、農家従来利益の知られたる桃・梨栽培の安全なるに心を据へ苹果栽培に志を注ぐもの無かりし折から、今日前此美果珍種の実際を観

るに及び、深き夢より呼起こされし心地して、博覧会出張の東北人士に就き苹果栽培の状況窺ひ尚一般果実嗜好の状態に着目し、苹果栽培が前途望多きをトすると共に、果物改良の必要を認め愛に進んで苹果栽培に従事するの志を勃興するに至れり……」と記している。

1890(明治23)年4月、田村昌八郎は山田元五郎と共に、北海道及東北5県の勸業博覧会受賞者40余人に手紙を出して照会し、苗木31種を取寄せ苹果の品種撰択と栽培技術の研究に励み、試験苹果中より紅魁・祝・柳玉・紅玉の4種類を最優等品種として認め奨励した。

1891(明治24)年、晴耕園の果樹面積は8反1畝2歩(約80 $\bar{7}$)で、苹果209本(紅魁145本・中成子1本・満江10本・柳玉10本・青柳10本他)、1894(明治27)年2町5反5畝4歩(約2.5 $\bar{2}$)苹果1,205本(紅魁333本・中成子159本・紅紋78本他)、1895(明治28)年には1,269本になり暖地苹果栽培に成功したので、近県はもちろん、鹿児島県から嘘言であるといつて観察にきている。晴耕園は1897(明治30)年苹果の奨励品種を紅魁・中成子(祝)・満江・柳玉・倭錦の5種類にきめている(村上1951・PP65-94)。

1900(明治33)年興居島果樹協会が設立された頃が興居島苹果の最盛期で、1903(明治36)年には100 $\bar{2}$ を越えた。

『晴耕園史1910・P124』には、「1906(明治39)年農商務省農事試験場園芸部長恩田鉄弥博士が来村して果樹園を視察した。由良小学校における果樹に関する講演で、苹果が暖地で結実するのは気候が温暖なため矮生樹となって結果を促すものと考えていたが、実はそれに反して相当の育成をして完全に結果しつつあるを見て驚いた」と絶賛している。

1903(明治36)年調査の統計資料では、興居島村の10 $\bar{7}$ 以上果樹栽培農家は325戸、由良が140戸・泊105戸・^{かどた}門田80戸で栽培面積が200 $\bar{2}$ 、苹果100 $\bar{2}$ ・桃60 $\bar{2}$ ・梨20 $\bar{2}$ ・雑柑20 $\bar{2}$ であった。ところが、1901(明治34)年門田の山本八十郎所有の苹果園に発生した綿虫が島内に拡散して猛威をふるい始めた。1904(明治37)年晴耕園の苹果樹2,618本が、1907(明治40)年には綿虫被害が激しく伐採して1,266本に、1909(明治42)年には849本に減った。晴耕園の苹果樹の減少に象徴されるように、興居島苹果は落日の如く衰退していった(表5)(窪田1988・PP13-27)。

『村上(1951・P85)』は、興居島の苹果(林檎)の衰えた理由について、綿虫被害の他に、「早生苹果が桃

表5 温泉郡興居島村（現・松山市）の苹果栽培面積の推移

明治36年	大正3年	大正7年	大正15年	昭和5年	昭和13年	昭和35年
1903	1914	1918	1926	1930	1938	1960
100ha	75	10	7.7	14	7	0.2

窪田重治 1980 愛媛の果樹産地の形成とその変容P71により作成

枇杷梨及び西瓜などに押されたこと。樹令がきたこと。貯蔵用の国光・紅玉は青森・長野などに競争できないこと。早生系も落葉果樹に重点をおく香川・岡山・新興産地の友浦苹果（林檎）に蚕食されてしまったことなどが要因として考えられる」と指摘している。

伊予郡原町村（現・砥部町）宮内の山岡吉五郎も1898（明治31）年紅魁・中成子（祝）を10.5畝栽植し9年間栽培したが、欠損ばかりで失敗し梨に転換している（村上1951・P89）。

3 越智郡宮窪村友浦の苹果栽培

1947（昭和22）年愛媛県農林水産調査統計によるリンゴの集団的栽培面積を見ると、県内には12.5畝のリンゴ園があった（表6）。そのうち、89%の11.1畝を越智郡宮窪村（町）友浦（図2）（現今治市）が占め、他は温泉郡東中島村0.5畝・川上村0.3畝・三内村50本・越智郡津倉村0.3畝・瀬戸崎村0.2畝・小西村0.1畝・上浮穴郡川瀬村に散在的栽培の苹果樹が200本あった。それが、1951（昭和26）年には9.6畝に減少し、宮窪村8.3

畝・津倉村が1.0畝（現・今治市）で、宮窪村（町）の友浦が県内苹果園の86.4%を占めている（表6）参照。1947（昭和22）年のリンゴ実収高分布を（図3）で示した。面積収量共に越智郡宮窪村友浦が9割以上を占めている。

『村上（1951・P89）』は、「友浦海岸の蜜柑も植えない瘠せ地に15畝を栽培し成功している。こんな処に突然苹果が植えられたのは、宮窪杜氏の賜である。1906（明治39）年青野太郎吉・越智友吉の両杜氏が温泉郡興居島村泊の酒屋へ醸造に行ったところ、綿虫のため捨てられた苹果苗木13本を持ち帰った。その後、越智友吉は矢野藤作・今川清作らを説いて興居島から苗を取寄せ山を開いた。綿虫被害で蜜柑に転換したが、今川清作だけは苹果栽培に一貫した。大正末期に苹果で巨利を博したので、皆刺激されて苹果の栽培を復活しはじめた。1949（昭和24）年は苹果が豊作で1貫（3.75畝）200円もしたので、苹果景気を呈した。

友浦苹果は香川産よりも2週間早く出る。早生の紅魁は端境期に出荷され好評で、樹勢も旺盛で綿虫にも強く栽培が容易であった。中生種の中成子（祝）の2種類で9割を占め、暖地苹果の代表格として、7月下旬未熟のうちに収穫して出荷した。

旭・紅玉・晩生種の国光・ゴールドデンデリシャス等も栽培されたが、これらの苗木は埼玉県安行（現・川口市）から取寄せた」という。

表6 愛媛県の市町村別リンゴの栽培面積と収穫量

（反……991,736㎡ 貫……3.75kg）

		昭和22(1947)年			昭和26(1951)年			
		集団的栽培	散在的栽培	実収高	集団的栽培	散在的栽培	実収高	反当収量
温泉郡	東中島村（現・松山市）	5反	一本	180貫	反	本	貫	貫
	川上村（現・東温市）	3		70				
	三内村（現・東温市）	—	50	—				
越智郡	小西村（現・今治市）	1		10				
	津倉村（現・今治市）	3			10	45	2,000	200
	宮窪村（現・今治市）	111		2,000	83	84	8,300	100
	瀬戸崎村（現・今治市）	2	100	300				
伊予郡	中山町（現・伊予市）		30	10				
上浮穴郡	久万町（現・久万高原町）				1	1	460	450
	川瀬村（現・久万高原町）		120	10	2	4	1,000	480
県計		125	300	2,580	96	134	86,460	

資料：昭和22年調査 愛媛県総務部統計課 1949 愛媛県統計書（農林水産調査）
昭和26年（1951）愛媛県市町村勢要覧により作成

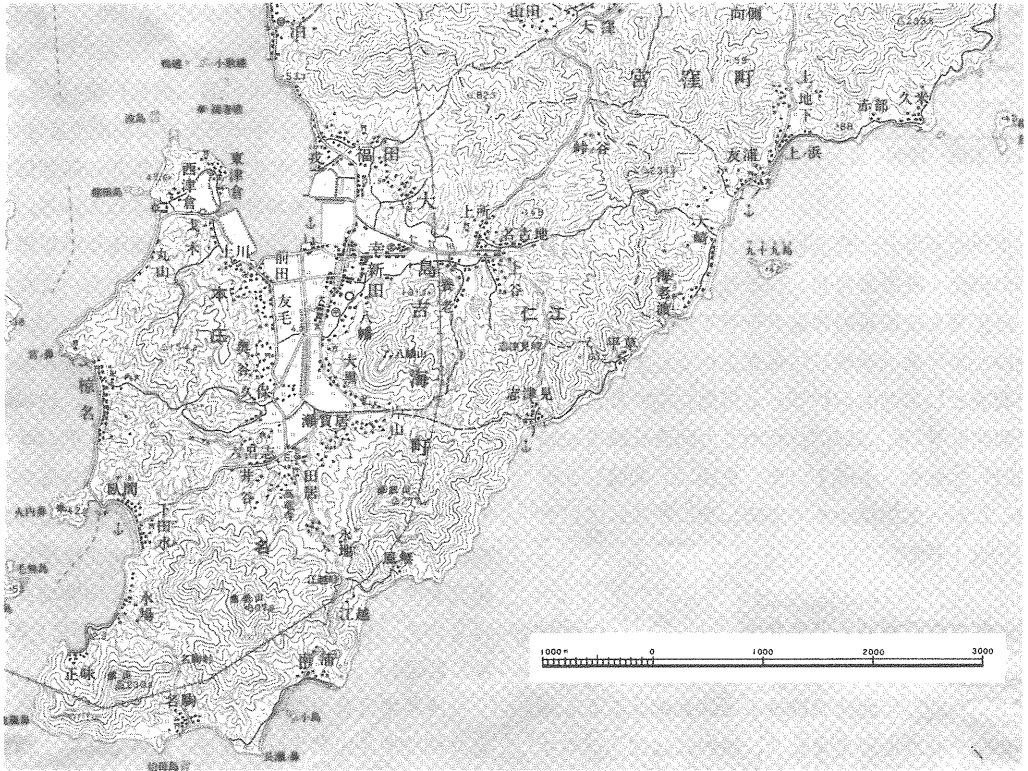


図2 国土地理院 1 : 50,000 今治東部 昭和47年修正
今治市沖の大島、今治市宮窪町友浦付近 (旧宮窪村)

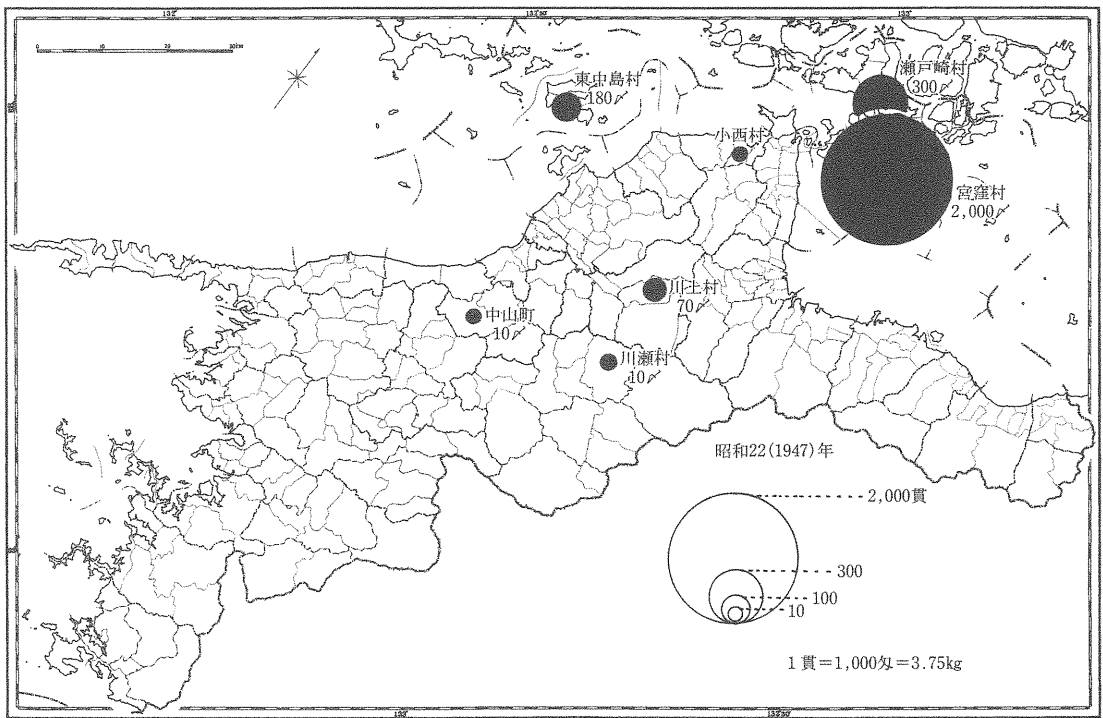
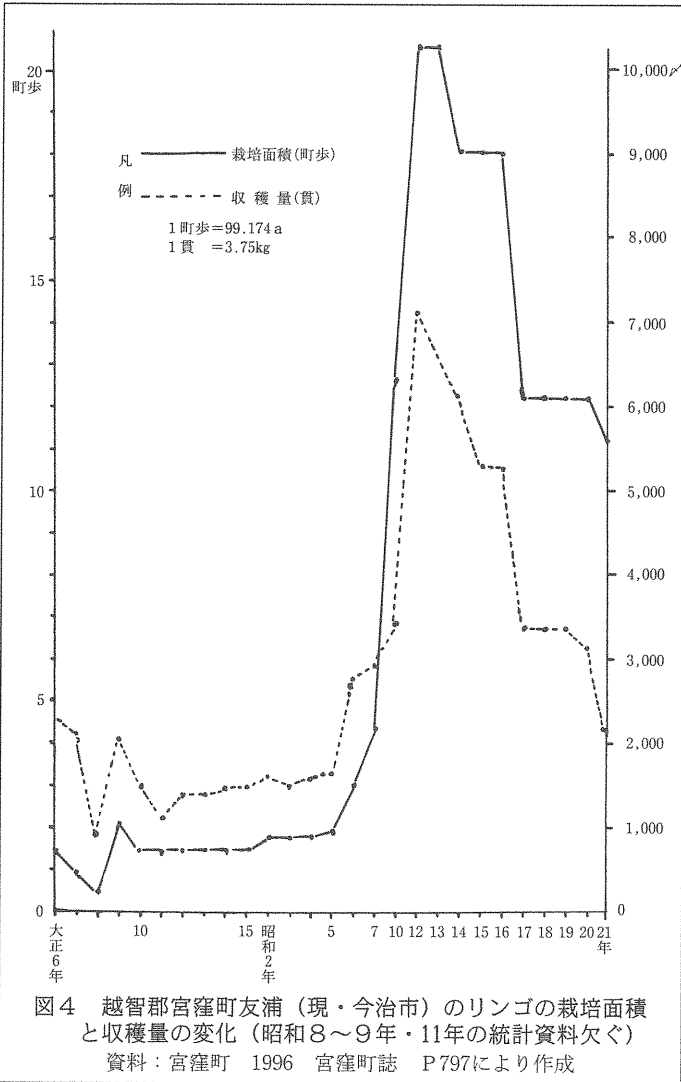


図3 愛媛県の町村別リンゴの実収高分布 1947 (昭和22) 年
資料：愛媛県総務部統計課 1949 愛媛県統計書農林水産調査により作成

一時は浜辺に苹果の競り市がたつほどの盛況を極めたが、友浦苹果も綿虫に悩まされ次第に柑橘に転換がすすみ、1950年代に衰退してしまつた（阿川1988・P13）。

『宮窪町誌1994・PP796～797』には、「1887（明治20）

年頃、興居島の越智友一から祝の苗木を買受け栽培したのが始まりで、良く生育し結実もしたが、綿虫の被害が激しく失敗した。1900（明治33）年今川精三が周囲の反対を押し切って28本栽植したのが友浦苹果の基礎になつた」と記している。



友浦苹果は大正末期から昭和初期にかけて増殖し、戦時中は下の浜に朝市がたつほど盛んになり、1937～1941（昭和12～16）年が最盛期で友浦の経済を支えた（図4）。友浦の苹果は「青リンゴ」といわれ、甘酸っぱい独特の味覚があつた。戦後も「島の青リンゴ」と名声を高めたが、樹勢の衰弱と病虫害の激発により1951（昭和26）年には8.3%に減少し、その後は蜜柑ブームで温州蜜柑園に転換してしまつた。

『宮窪町誌1994・PP796～797』は、友浦の苹果栽培の立地要因を「礫質砂土の瘠せ地で、発育と結果のバランス調整上都合が良かった。虫害の被害に悩まされたが、無袋栽培のため風雨に強く風当りの強い土地でもかえつて有利であつた。20～40度の急傾斜地で樹形を大きくできないため、反当（10²当）80～100本の密植で強剪定の自然形とした」ことをあげている。

4 上浮穴郡川瀬村畑野川（現・久万高原町）の苹果（林檎）栽培

川瀬村畑野川は海拔500～600^mの高冷地（図5）で、本県の冷涼地域であるが苹果の栽培に関しては、青森・長野の苹果（林檎）主産地に比べると気候条件は劣る（表7）。愛媛県農務課の『山村農業の実態1951・

表7 主要リンゴ産地の気温・降水量と久万町の比較

事項 産地		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
		青森	気温℃	-2.8	-2.3	0.6	6.7	11.8	16.3	20.7	22.8	18.4	12.0	5.9
	降水量mm	114.5	108.3	82.0	67.9	72.8	79.6	134.8	119.2	139.2	115.3	140.7	160.5	1,305.8mm
長野	気温℃	-1.4	-0.8	3.2	10.1	15.1	19.7	24.1	25.1	20.6	13.6	7.5	1.7	11.3℃
	降水量mm	54.3	50.9	57.0	70.5	76.9	109.8	146.1	101.3	134.7	81.5	55.2	56.0	999.4mm
久万	気温℃	1.4	2.0	5.9	11.9	16.4	21.2	25.1	25.4	21.2	14.6	8.2	3.6	13.1℃
	降水量mm	73.0	77.9	121.7	127.6	151.6	262.0	238.3	193.1	232.1	140.9	85.8	105.5	1,813.5mm

資料：愛媛県農務課 1951 山村農業の実態P109により作成

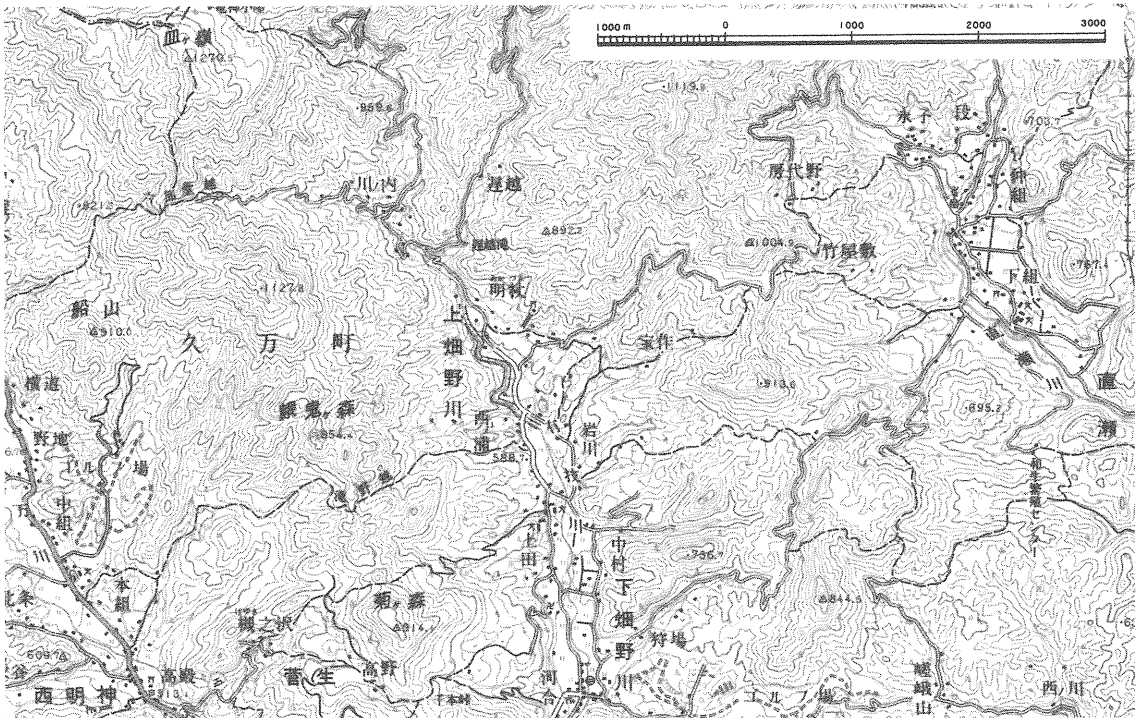


図5 国土地理院 1 : 50,000 松山南部 昭和55年修正
久万高原町畑野川付近の図 (注: 旧川瀬村)

PP109~111』は「わが国では4月~10月の平均気温18度以内のところは苹果の栽培に適し、夏季30度Cを越えても冬季の気温が0度Cを下り、しかも温度の低い地域であれば良品が得られる。

降水量は苹果栽培に最も深い関係をもつ。特に4月~9月の降水量が多いことは枝梢の発育が旺盛となり、花芽の分化が困難で結実不良となり、外観及び品質も劣る。このような条件の下で渡部延明氏は12年生の1樹で10数貫を結実させ、あの環境の悪い土地で何を作るよりも有利であると努力を続けている」という。

『村上1951・P90』は、「川瀬村の苹果栽培は新しい。1940(昭和15)年技術員の先覚者岡本淳氏が、青年道場の千本原に、また渡部延明氏(1912~)が上畑野川岩川に試作したのが最初である」という。主として早生種を栽培国光10本・紅玉2本・スターキング4本が植付られている。戦時中伐採しなかつたのが戦後結実し、小量を久万や松山に出荷した。1950(昭和25)年川瀬村の果樹栽培の現況は(表8)の如くであった。

『上浮穴農林業史1976・P105』には、「1905(明治38)年から1922(大正11)年までと、1934(昭和9)年~1942(昭和17)年までの間に栽培された記録がある。下畑野川では苗木の導入や肥培管理は高知県土佐

町のリンゴ園経営者と提携している。以前畑野川では早生苹果を栽培していたが、若木の間はよく結実していたのに老木化すると結実しなくなり、新しい品種選定を行ない、早生苹果を伐採して「むつ」「ゴールデンデリシャス」「ふじ」「紅玉」などの品種を植付けた」とある。

『山村農業の実態1951・P105』は川瀬村(現・久万高原町)の果樹栽培の起源について、「1838(昭和13)年春下畑野川千本に岡譲が梨(二十世紀)60本、長十郎15本・苹果20本を20%に栽植した。これが結果期に入る頃大戦となり、その後放任状態であったものを、1947(昭和22)年下畑野川千本の渡部鬼子雄が譲り受け肥培管理に専念したが、苹果はモリタニア病のため数本となり、「二十世紀」は密植のため半減した。しかし「長十郎」は好成績を収めた。

同じ頃、上畑野川字岩川の渡部延明は苹果栽培に着目し、1938(昭和13)年3月に50本、1939~1940(昭和14~15)年と3ヶ年間に合計80本、品種はスターキング・紅玉・国光の苗木を東京の日本種苗から取寄せて栽植し、これを撫育すること親子の情をもってし、近年漸く1樹より10数貫の果実を得るようになった。この両氏が本村果樹栽培の草分けであり、両園ともに

表8 上浮穴郡川瀬村（現・久万高原町）果樹の現況 昭和25（1950）年9月

大字	場所	標高	苹果	梨	柿	桃	栗	梅	栽植年
下畑之川	千本	650m	20本	80本	100本	—	—	—	古いもの及び、昭和13年
	西峰	650	250	—	50	—	—	—	昭和24・25年
	新開山	600	130	20	20	—	—	—	—
	堂之窪	630	—	100	30	—	30	50	昭和15年
	上之段	630	50	—	—	—	—	—	昭和24・25年
西之浦	630	30	—	—	80	—	—	昭和24・25年	
上畑之川	明杖	650	50	—	—	—	—	—	昭和24・25年
	岩川	650	100	—	—	—	—	—	昭和13・25年
	川之内	750	100	—	—	—	—	—	昭和24・25年
畑之川口	散在するもの		150	40	300	20	40	20	
上直瀬	永子	800	450	20	—	—	—	—	昭和24・25年
	上直瀬	580	100	—	200	—	—	—	
下直瀬	笹森	800	100	—	100	—	—	—	昭和25年
直瀬口	散在するもの		100	30	100	10	20	30	
合計			1,630	290	1,030	50	140	120	

資料：愛媛県農務課 1951 山村農業の実態P105により作成

当地としては如何なる作物をも及ばぬ成績をおさめている」と記している。

川瀬村（現・久万高原町）には1949（昭和24）年に3,000本・1950（昭和25）年には1,500本の苹果が新植され、畑野川・直瀬および久万町・父二峰・仕七川・面河の隣接村にも普及し一時上浮穴郡内に34～35の苹果園が開かれた。川瀬村でも20の苹果園が開かれたが、中生系（10月下旬～11月）の紅玉・国光が多かったので夜蛾の被害が大きく衰微していった『愛媛青果連1968・PP308-309』。

5 愛媛の苹果（林檎）産地の動向

苹果（林檎）は従来疎植大樹の栽培が行われてきたが、1975（昭和50）年以後は品種改良と栽培技術の革新によって矮化栽培が普及してきた。主産地よりも約1ヶ月新鮮果実が出荷できる有利な販売から、暖地りんごが伸びている。

愛媛の苹果（林檎）は1953（昭和28）年の31をピークに蜜柑ブームで減少し、1965（昭和40）年8、1975（昭和50）年7にまで減った。1985（昭和60）年には蜜柑不況の影響で栽培戸数206戸、栽培面積も23に増加した（表9）。1990（平成2）年には39.6にまで広まった（図6）。

1965（昭和40）年西条市加茂地区に高知県から阿波3号他数種類を導入して栽培を始め、1985（昭和

60）年14戸が3栽培している。昭和50年代には、上浮穴郡久万高原町畑野川・直瀬・父二峰・仕七川地区および喜多郡内子町大瀬・五城の中山間地帯に観光りんご園を主体とした苹果（林檎）栽培地帯が拡散していった（表10）。

1975（昭和50）年以後、「つがる」「むつ」「ふじ」など新品種の登場と矮化栽培という新技術によって苹果（林檎）栽培が容易になり、県下各地で栽培されるようになった（図7）。1985（昭和60）年栽培面積25、1990（平成2）年には37.2になり、品種構成も「つがる」が46.8%、「ふじ」27.1%この2種類で7割を占め他に「千秋」「陽光」が1割を占めている（表11）。

矮化栽培は矮生台木の使用で木を小さく密植して省

表9 愛媛県のりんご栽培農家戸数と栽培面積

年次	栽培戸数	栽培面積				合計
		成園		未成園		
1965 昭和40年	78戸	21戸	2ha	57戸	6ha	8ha
1970 昭和45年	79		5		7	12
1975 昭和50年	42		5		2	7
1980 昭和55年	46					12
1985 昭和60年	206					23

資料：農林水産省統計情報部 農業センサス 都道府県別統計書38愛媛県1965～1985年により作成

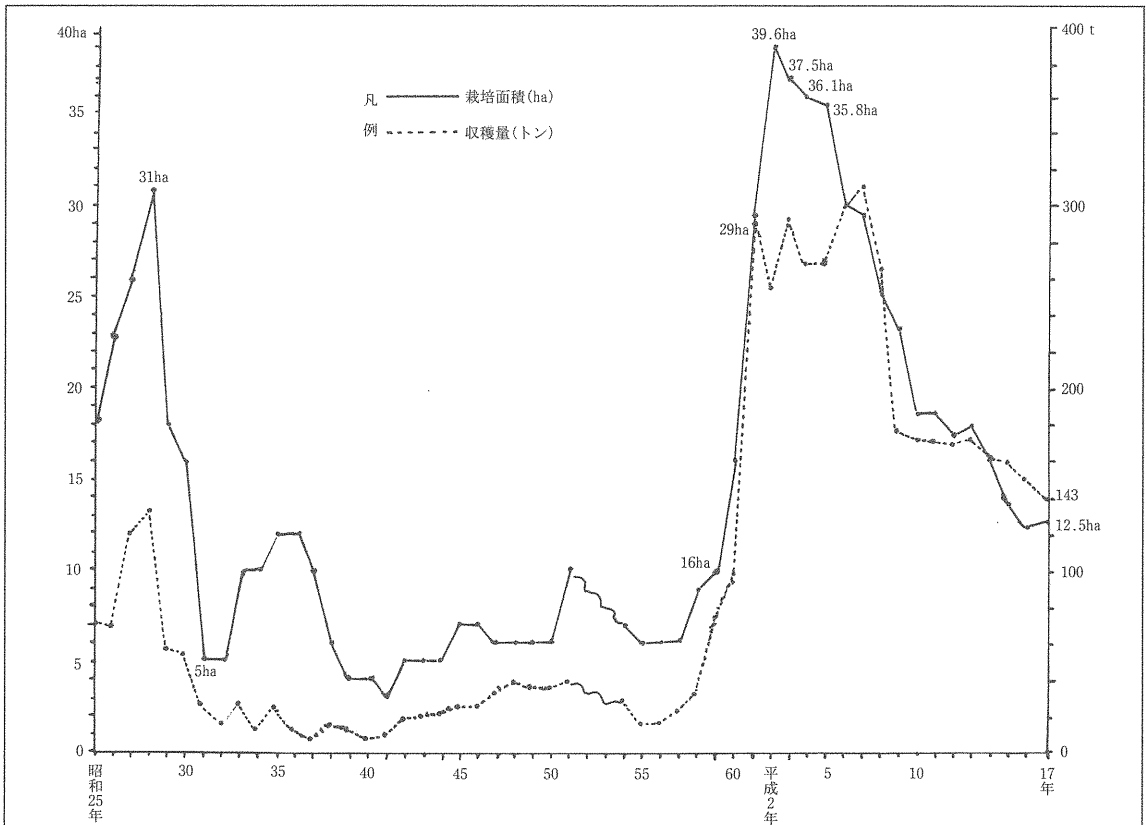


図6 愛媛県のリンドの栽培面積と収穫量の年次別変化

資料：阿川一美 1988 果樹農業の発展と青果農協・財団法人果樹産業振興桐野基金 昭和25～61年
平成2年以後は愛媛県農林水産部生産流通課 果樹統計資料により作成

表10 市町村別のリンゴ栽培面積と生産量の年次変化

年次 事項	平成2年(1990)年				平成8(1996)年				平成14(2002)年			
	未成園 ha	成園 ha	合計 ha	生産量 t	未成園 ha	成園 ha	合計 ha	生産量 t	未成園 ha	成園 ha	合計 ha	生産量 t
西条市	0.8	3.4	4.2	34.0		4	4	17.5				
伊予三島市	1.0		1.0									
朝倉村		1.0	1.0	6.0								
玉川町		1.0	1.0									
大三島町		3.0	3.0	30.0		2	2	17.0		1.5	1.5	9.0
久万町	6.0	6.0	12.0	100.0	1	9	10	188.0		10.0	10.0	130.0
美川村	1.0		1.0	2.0	0.2	0.8	1.0	1.7		1.0	1.0	7.0
面河村						0.8	0.8	3.0		0.8	0.8	5.0
小田町	1.0		1.0	2.0								
砥部町		1.2	1.2	28.0								
中山町		7.0	7.0	42.0		3.0	3.0	15.0				
内子町	0.5	1.0	1.5	15.0		1.0	1.0	5.0		1.0	1.0	5.0
八幡浜市		1.3	1.3	24.0								
宇和町	0.1	1.0	1.1	1.0						0.4	0.4	2.0
日吉村									0.3	0.5	0.8	0.6
その他共計	10.8	28.8	39.6	293.2	2.2	23.3	25.5	310.0	0.3	15.8	16.1	161.6

資料：愛媛県農林水産部 生産流通課 果樹統計資料により窪田作成

愛媛県における^{りんご}苹果産地の転移と形成

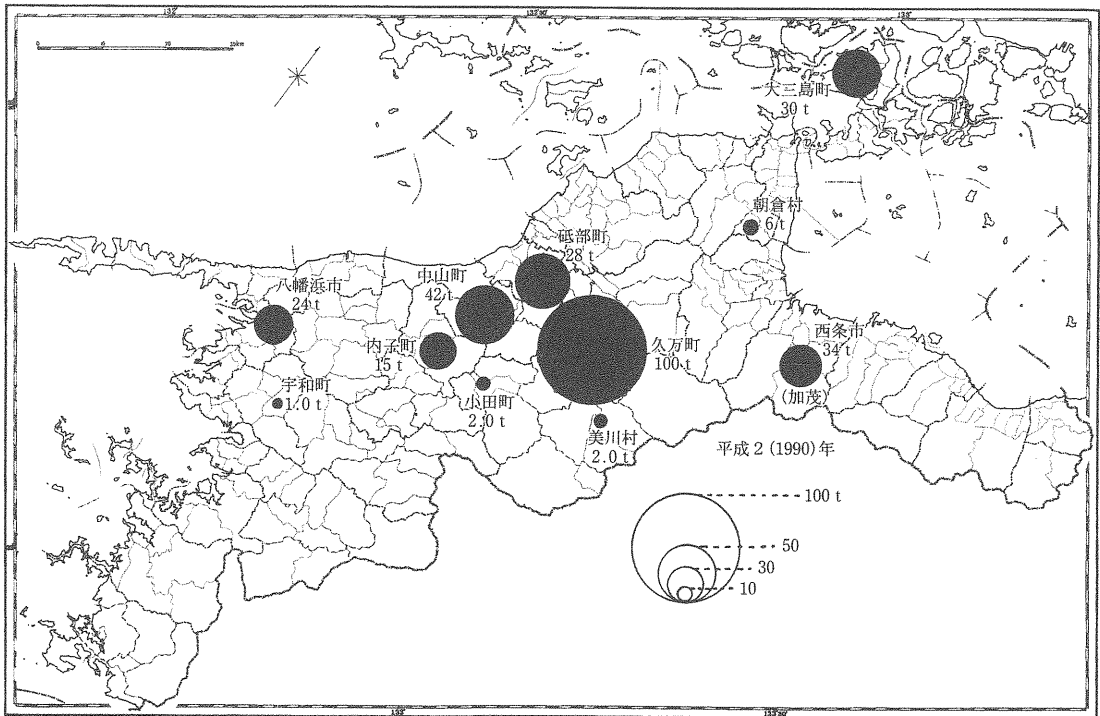


図7 愛媛県の町村別リンゴの実収高分布

資料：愛媛県農林水産部生産流通課 1991 果樹統計資料により作成

表11 市町村別リンゴの栽培品種構成 平成2 (1990) 年産

単位：ha

	つがる	ふじ	陽光	千秋	北斗	陸奥	王林	花祝	ゴールデン デリシャス	世界一	ジョナ ゴールド	その他	合計
西条市	2.5	1.2					0.5						4.2
伊予三島市	0.6			0.4									1.0
小松町	0.1	0.1											0.2
丹原町	0.2												0.2
朝倉村	0.9	0.1											1.0
玉川町	1.0												1.0
宮窪町		0.2											0.2
上浦町	0.3												0.3
大三島町	1.8	1.2											3.0
松山市	0.4	0.1											0.5
久万町	2.7	2.7	1.4	1.5	0.2	0.7	0.2		0.8	0.2	0.4	1.2	12.0
面河村	0.2	0.2	0.2										0.6
美川村	0.1	0.1		0.1								0.7	1.0
小田町	0.5	0.5											1.0
砥部町	0.8	0.2						0.2					1.2
広田村	0.2												0.2
双海町												0.5	0.5
八幡浜市	1.0	0.3											1.3
内子町	1.0	0.5											1.5
肱川町	0.1	0.1		0.1									0.3
宇和町	0.3	0.5		0.2									1.1
吉田町	0.1	0.1		0.1									0.3
県計	17.4	10.1	1.6	2.4	0.2	0.7	0.8	0.2	0.8	0.2	0.4	2.4	37.2
	46.8%	27.1	4.3	6.4		1.9	2.1		2.1			6.4	100.0

資料：愛媛県農林水産部生産流通課 平成3年 果樹栽培状況等表式調査により窪田作成

表12 市町村別リンゴの品種別栽培面積 平成17(2005)年産

単位: ha

市町	品種	つがる	北斗	千秋	陽光	ふじ	王林	ジョナゴールド	その他	合計
今治市		0.4				0.3				0.7
伊予市		0.2								0.2
久万高原町		3.6	0.1	2.1	0.1	3.4	0.1	0.1		9.5
八幡浜市		0.3								0.3
内子町		0.5				0.5				1.0
鬼北町		0.1		0.1		0.2	0.1	0.1	0.2	0.8
県計		5.1	0.1	2.2	0.1	4.4	0.2	0.2	0.2	12.5

資料: 愛媛県農林水産部生産流通課 2006 平成17年産果樹栽培状況等表式調査により窪田作成

力・早期多収・高品質生産をねらった新しい栽培方法で、品種改良により暖地でも着色する品種「ふじ」が登場し、また台木も改良されて矮化栽培が実用化した(愛媛県1988・PP369-370)。

「つがる」は青森リンゴ試験場が1930(昭和5)年ゴールドデリシャスにある品種を交配して、実生から選抜し、1970(昭和45)年に発表した品種で、果実は大玉で玉揃いがよく品質も良好で収穫期は8月中旬である。「ふじ」は農林省園芸試験場盛岡支場が、青森県藤崎町で1939(昭和14)年国光にデリシャスを交配実生から選抜した。国光より貯蔵力があり品質は甘味果汁肉質ともに国光より優れているとして注目、1962(昭和37)年ふじと命名した。収穫期は10月下旬である(表12)(永澤1976・PP65-66)。

6 地域活性化と観光リンゴ園

久万高原町の観光リンゴ狩は生産者と消費者との交流により、地域の活性化を図る町のイベントの一つで、県下に先駆けた観光農園である。戦後の久万町に苹果栽培が本格的に復活したのは、1958(昭和33)年竹森眞一が高知から苗を取寄せて栽植したのが始まりで、阿波3号など久万の気候に適した品種ではなかったが、その後の改良と栽培技術の研究により、久万に適する「ふじ」・「つがる」・「紅玉」・「陽光」などに品種を更新した(久万町2004・PP108-109)。

1975(昭和50)年代から久万高原町・喜多郡内子町大瀬地区を中心に観光リンゴ園を主体にした暖地苹果(林檎)の栽培がすすんだ。久万高原町ふるさと村の町営リンゴ狩園は久万高原町の観光の一翼を担うようになった(写真2・3・4)。

畑野川・千木・西峰・明神・父二峰に生産者竹森英

輔ら12名による5畝の苹果(リンゴ)狩園があり、付設として道案内・駐車場・休憩所・食堂・手洗場などがあり、利用者の便が図られている。利用者は子供と自然のふれあいをはかる家族旅行者および日帰りレクリエーションを楽しむ職場や同好者グループなどが、果実のもぎとりや果樹の観察に利用している(愛媛県1988・PP369-370)。

観光リンゴ狩にも色々あって、従来の味覚狩り型(入園料を払って食べ放題持ち帰り分別料金)から、最近最も力点を置いているのは、体験交流型のリンゴ樹オーナー制である。1~2本を丸ごと期限つきで特定の方に貸与し、契約期間内はその樹の権利がオーナーに帰属し、管理育成から摘果袋掛もぎとりまで自分の自由になる。労働で汗を流し地元の人々との触れ合い、育てることの楽しさと収穫への期待感は自然環境や農業景観保存と結びつき、都市住民との接点は増すのではないかと(久万町2004・PP108-109)と期待している。

2009(平成21)年久万高原町では7軒の農家が9.5畝栽培し年間収穫量は128トンで、観光園が中心である。夏



写真2 ふるさと旅行村の観光リンゴ園 入園料600円で食べ放題
久万高原町 1992年10月18日 窪田撮影

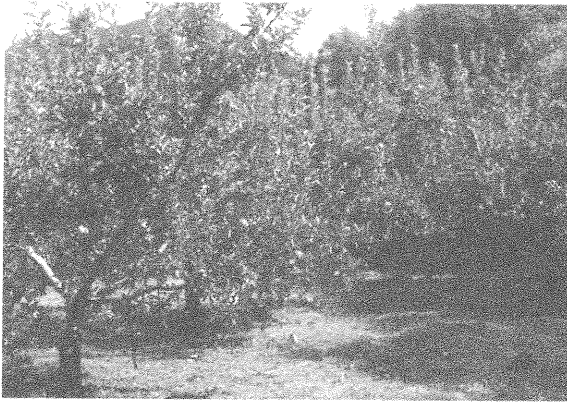


写真3 久万高原町畑野川の観光りんご狩園
1992年10月18日 窪田撮影



写真4 久万林業まつり会場での久万高原りんごの即売場
久万高原町菅生 1992年10月18日 窪田撮影

から秋にかけて久万高原の味覚が満喫できる観る観光から体験する観光に、物産品と共に思い出を持ち帰っていただく観光を目指している。

7 結 語

愛媛の暖地苹果（りんご）の栽培について、その盛衰と産地転移のプロセスと動向について変遷史的な考察をした。これを5項目に要約して結語とする。

1. 愛媛の果樹園芸農業として苹果栽培の歴史は古い。中予地方の明治中期から発達した果樹園芸は、先覚者三好保徳・浅海村味栗（現・松山市）の尾上又次郎・興居島村（現・松山市）の田村昌八郎らによって苹果の栽培が始められ、果樹栽培の先駆的役割を果し、果樹農業の礎となった。
2. 興居島苹果は暖地苹果産地として発展し、村の基幹的作物として一時期産業経済発展の基盤を形成したが、明治末期に綿虫被害により衰微した。苹果から桃・枇杷の夏果物に転換、戦後の蜜柑ブームで柑橘産地に変貌した。
3. 越智郡宮窪村（現・今治市）の友浦苹果は、興居島に酒造出稼した宮窪杜氏によって、興居島苹果が導入されたものである。島の青りんごとして評価され、隣接の津倉村・大三島の瀬戸崎村にも一時普及した。戦後の蜜柑ブームで温州蜜柑に転換し衰退してしまった。
4. 上浮穴郡川瀬村（現・久万高原町）には、戦前苹果が導入されていたが、本格的栽培は昭和30年代以後である。特に栽培技術の進歩と新品種の開発で、

久万高原でも暖地苹果の栽培が容易になり、矮化栽培によって普及した。

5. 愛媛県では果樹類の中で苹果の占める地位は低い。暖地において北日本や中央高地の冷涼地帯の代表的果実の苹果が栽培されるという希少価値で珍らしがられ、中山間地帯の地域活性化の観光産業として期待される。

注および引用参考文献

- 注1 田村信嘉1910 晴耕園史 玉林堂172頁、1873(明治6)年より1909(明治42)年に至る晴耕園14町4反9畝28歩(約14.4%)の営農記録。
- 注2 晴耕園史は田村信嘉が1905(明治38)年2月稿を起し、以来精密な調査を重ね田村昌九郎が信が事暦より事を始め、1909(明治42)年に至る間の本園事業を記録したもので、1873(明治6)年より1909(明治42)年に至る晴耕園の営農記録誌である。興居島の果樹栽培に関する諸研究の基本的資料である。
- 阿川一美 1988 果樹農業の発展と青果農協・財団法人果樹産業振興桐野基金606頁。
- 伊予果物同業組合 1932 伊予のくだもの67頁。
- 愛媛県農会 1916 伊予乃園芸102頁。
- 愛媛県青果農業協同組合連合会 1968 愛媛県果樹園芸史1104頁。
- 愛媛県農務課 1951 山村農業の実態173頁。
- 愛媛県 1988 愛媛県営農技術史731頁。
- 越智郡宮窪町 1994 宮窪町誌1166頁。
- 温泉郡小野村 1960 小野村史401頁。

- 温泉郡教育会 1909 愛媛県温泉郡誌「興居島村誌265～282」松山向陽社402頁。
- 窪田重治 1990 愛媛の果樹産地の形成と変容 青葉図書339頁。
- 窪田重治 1991 北条市浅海を中心とする浅海梨栽培の盛衰について「伊予史談282号」伊予史談会PP30～43。
- 窪田重治 1988 興居島における果樹栽培の変遷「伊予史談270号」伊予史談会PP13～27。
- 窪田重治 2002 愛媛県北条市における果樹栽培の展開と地域的変遷「愛媛の地理第16号」愛媛地理学会 PP 6～21。
- 久万町教育委員会 1976 上浮穴農林業史456。
- 久万町 2004 久万町誌補訂版275頁。
- 小林章 1986 果物と日本人 日本放送出版協会230頁。
- 永澤勝雄 1976 果物のたどってきた道 日本放送出版協会230頁。
- 村上節太郎退会記念事業委員会 1975 からたち594頁。
- 村上節太郎 1951 愛媛県の果樹栽培地域の地理学的研究(一)「愛媛大学紀要第四部社会科学第一巻第一号」愛媛大学 PP65～94。

この小論を愛媛大学法文学部教授藤目節夫先生の退官記念論文とする。